

論文題目

あああを用いた
あああ予測

Hoge Hoge Hoge

指導教授

萩原 将文 教授

慶應義塾大学 理工学部 情報工学科

令和 99 年度

学籍番号 12345678

田中 太郎

目次

あらまし	1
第1章 はじめに	2
第2章 関連研究	4
2.1 XAI	4
2.1.1 概要	4
2.2 強化学習	5
2.2.1 ゲームへの応用	5
第3章 HOGE を用いた予測	7
3.1 時系列予測	7
第4章 評価実験	8
4.1 実験条件の設定	8
4.1.1 データセット	8
4.1.2 比較手法	8
4.2 あああの予測	8
4.2.1 実験方法	8
4.2.2 実験結果	8
第5章 結論	10
謝辞	12
参考文献	13

付録	14
付録 A データの前処理	14
A.1 ヒストリカルデータ	14
付録 B 実験結果詳細	15
B.1 の予測	15
付録 C のモデル化	16
C.1 異なる	16
付録 D のヒストグラム	17
D.1 異なる期間	17

あらまし

本論文では木探索を用いた強化学習アルゴリズムに対して判断の可視化を行った。具体的にはゲームの中で重要度が高いとされる地点を検出し、その地点を親としてそこから派生する決定木中の先読みを結果に基づいてグループ化し、最終的に最も多数派となったグループの分岐をユーザーに提示することで決定木内の傾向を示した。本論文におけるタスクは connect4、使用するネットワークは alphaZero を簡易的に模した AlphaZero baseline である。ゲームの途中の地点から最終図を予測し、その精度を調査する実験とユーザーインタフェースを用いて使用感や上達の条件等を記録する実験の二種類の実験を行った。

結果として、既存手法に対して高い予測精度や、ユーザーの満足度を出すことに成功した。

第1章

はじめに

近年の AI の発展は目覚ましく、画像分類や異常検知などの単純なルールで記述する事が困難なタスクや、更には長らく人間に固有の技術であると考えられてきた画像や文章の生成 [1] の分野においてさえ、高い性能を発揮するまでに AI 技術は成長した。特に昨年の stable diffusion[1], chat GPT[1] の登場により人間の生産労働の在り方、人間と AI の関係、ひいてはこの先の社会が AI とどう付き合い合っていくのか、AI によってどう変わっていくのかを専門家だけでなく一般の人々も含めて考えざるを得ない段階に差し掛かっていると言える。この「優れた AI に対して人間はどう接するべきか」という命題を考える際には既に人間を大きく凌駕した AI が存在する領域において手法の構築や実験を行うのが適当である。そのため、ここでは connect4 と呼ばれる比較的単純なボードゲームを題材とし、2018 年に当時世界有数のプレイヤーであったイ・セドルを四勝一敗で圧倒した AlphaZero[1] を簡易的に模したネットワークである AlphaZerobaseline[1] を用いて本論文を執筆した。優れた AI が社会で広く実用化され、受容されるためには AI の判断や生成物 (以下単純に「出力」という表現を使用する) が生み出される過程の透明性がいずれは必要不可欠になることが予測される。実際に画像生成 AI が上述の様に一度オープンソース化された 2024 年現在においても多くの国では AI 生成物を市販することが法律で禁止されており [1], 市販が違法と明記してはいない日本においても AI 法の議論は活発に行われている。また、そのような法的・倫理的観点による AI の透明性への希求だけでなく「どうすれば人間も AI のような成果を生むことができるのか」という探求心や学習意欲から成る説明性へのニーズが広く湧き起こる事が予測される。特にゲームのように

「AI対人間」と表現すべき対立構造を強く有する領域においては後者のニーズがより大きくなっていくものと予測される。現に囲碁, 将棋, チェスなどの主要なボードゲームをオンラインでプレイできるサービスにはゲーム終了後の振り返り(感想戦)においてAIの判断やAIによる想定図を閲覧できるサービスが数多く提供されている。研究においてもボードゲームの学習支援という形で「AIに学ぶ」試みが存在する。しかし、後述するようにそれらの研究は各ゲームのドメイン知識等を使用した、従来の人間による指導方法の自動化に近い形態のものが多く。ここでは人間の学習のサポートツールとしてAIを用いるというよりは、AIの動作を人間のユーザー向けに説明する手法を構築し、人間にAIの挙動を理解してもらうことを通じて人間側のスキルを向上させる試みを行った。本論文における提案はゲームの勝敗を左右する地点を検出する指標の定義、そして適切な予測を決定木から取り出す手法の二つに大別される。また、実験も提案手法を用いてゲームの終了状態を予測する実験と、ユーザーの使用感や学習効果を調査する実験の二つを行った。

第2章

関連研究

2.1 XAI

2.1.1 概要

XAI とは explainable AI(説明可能 AI) の略語であり、AI を人間に対して説明可能なものにする、もしくは説明可能な AI を構築する領域である。本論文は AI の判断根拠として先読みを示す意味で XAI の分野に属する研究であると言える。ここでの「説明可能性」の語は「人間に理解できる形での説明を与える能力」[1] と定義され、「いつ、どのような、どのように」説明を与えるかによってさらに細かく分類される。「いつ」、つまりどの時点で説明を与えるか、に関しては既存のネットワークに対して新たに説明を加える「事後的」説明と初めから動作の根拠を示せるようにネットワークやシステムを構築する「事前的」説明に分類できる [1]。「どのような」、つまり説明の内容についてはが存在する。また、「どのように」つまり説明を表現する形態としては saliency map, Grad-CAM[1] といった視覚的な可視化や、あとで [1] といった文章生成等が存在する。本論文において構築するシステムは「事後的」「局所的」「視覚的」説明を提供する。

Wavenet[1] は音声波形を時系列データとして自己回帰モデルで学習することによって、人間の声のような自然な音声を生成することができる。時点 t における観測値を x_t , $\mathbf{x} = \{x_1, \dots, x_T\}$ を観測値の全体集合とする。このとき、波形

の同時確率は条件付き確率の積として以下のように表現される。

$$p(\boldsymbol{x}) = \prod_{t=1}^T p(x_t | x_1, \dots, x_{t-1}) \quad (2.1)$$

つまり, x_t は前時点の全てにおけるサンプルに条件づけられる。

2.2 強化学習

強化学習はタスクを主体と環境のやり取りとして定式化する形でタスクに取り組む分野である。状態 (s) と行動 (a) が次の状態 s' と環境から与えられる報酬 r が決定されると仮定する。その仮定の下、環境から与えられる報酬の合計を最大化する。報酬を大きくするためには状態 s に応じて適切な (より大きな報酬をもらえる可能性が高い) 行動を選択する必要がある。ある状態である行動をとった場合の報酬の合計に対して見積もりをとり、見込まれる値が最も大きい行動を選択することでより大きな報酬を獲得できると期待できる。このようなある状態である行動を取った場合の報酬の合計の見積もりを $Q(s, a)$ とした場合、

2.2.1 ゲームへの応用

ボードゲームでは通例、報酬はゲームの最後に勝敗として与えられる。

因果的畳み込み (causal convolutions) が Wavenet の最も重要な部分である。図 2.1 に因果的畳み込み層のスタックを示す。

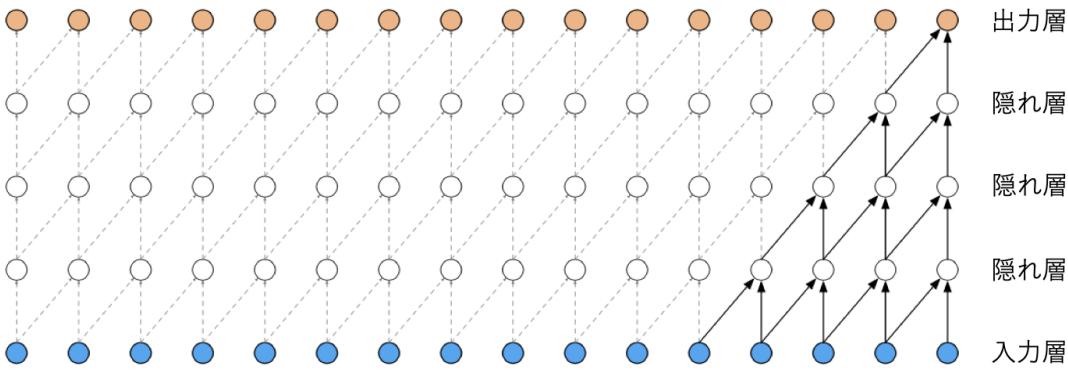


図 2.1: 因果的畳み込み層

第3章

HOGEを用いた予測

3.1 時系列予測

hoge は今まで多く行われてきた．[2] はあああ．

第4章

評価実験

4.1 実験条件の設定

4.1.1 データセット

為

4.1.2 比較手法

—

4.2 あああの予測

4.2.1 実験方法

2017 年

4.2.2 実験結果

表 4.1 に

表 4.1: あああといいいの予測誤差

	2019		2018		2017	
モデル	ああ	いい	ああ	いい	ああ	いい
Naive	1	1	1	1	1	1
TCN	1.0895	0.9032	1.4791	0.9198	1.2888	0.8555
LSTM	1.0384	0.9295	1.4917	0.9725	1.1627	0.8541
提案手法	1.0977	0.8698	1.3824	0.9439	1.2061	0.8516

第5章

結論

本論文では
今後の課題を以下に挙げる．

- の向上
必要がある．
- への応用
を行いたい．

- の改善

今後，取り組みたい．

謝辞

本研究を行うにあたり親身に相談に乗っていただき，ご指導してくださった萩原将文教授，ならびに共に問題解決，議論，相談，および実験に付き合ってくださいました研究室の先輩方，同期の皆様，実験に参加してくださった大学の友人達に深く感謝いたします．誠にありがとうございました．

参考文献

- [1] Aaron van den Oord et al. “Wavenet: A generative model for raw audio”. In: *arXiv preprint arXiv:1609.03499* (2016).
- [2] Bing Hwang Juang and Laurence R Rabiner. “Hidden Markov models for speech recognition”. In: *Technometrics* 33.3 (1991), pp. 251–272.

付録 A

データの前処理

A.1 ヒストリカルデータ

為

付録 B

実験結果詳細

B.1 の予測

第

付録C

のモデル化

C.1 異なる

あ

付録D

のヒストグラム

D.1 異なる期間

図